

<p>事案名</p>	<p>横浜市（第2海軍航空廠瀬谷補給工場・横須賀海軍軍需部[瀬谷]）の事案（神奈川県14-11-1）</p>
<p>フォローアップ調査資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・『相模海軍工廠』1984年〔1〕 ・Intelligence Report on Japanese Chemical Warfare, Volume〔2〕 ・「毒瓦斯及其ノ充填兵器処理ニ関スル件」昭和20年9月〔3〕 ・「日本海軍ニ於ケル化兵戦関係概況」（日付なし）〔4〕 ・「化学兵器調査ノ件報告」昭和20年11月5日〔5〕 ・Reports of U.S.Naval Technical Mission of Japan, 1945-1946〔6〕 ・Activities of Team No. 53 for the period of 15 Oct 45 to 31 Oct 45. (Target No.337(Nao Shima, hikoku), Technical Intelligence Co.(Seya, Ikeko))〔7〕 ・「旧軍ガス弾等の全国調査結果（案）」〔8〕 ・「『旧軍毒ガス弾等の全国調査』のフォローアップ調査について（回答）」平成15年10月23日〔10〕 ・「昭和48年の「旧軍毒ガス弾等の全国調査」のフォローアップ調査結果について」平成15年8月〔11〕
<p>追加資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「海軍勤務回想（三式弾、風船爆弾、広島原爆調査、化学兵器の研究）」〔A1〕 ・「濱名湖に投棄された軍用ガスの処分について（通知）」昭和24年12月28日〔A2〕 ・『日本海軍史』（第11巻）〔A3〕 ・「終戦時に於ける横須賀鎮守府関係参考資料」〔A4〕 ・「第2海軍航空廠引渡目録」〔A5〕 ・「横須賀海軍軍需部引渡目録」1/3〔A6〕 ・『神奈川の米軍基地』（平成13年2月）〔A7〕 ・『横浜市と米軍基地』（平成15年）〔A8〕 ・『神奈川新聞』平成9年12月9日〔A9〕 ・『毎日新聞』平成9年12月9日〔A10〕 ・旧軍毒ガス弾等についてのアンケート調査結果（相模海軍工廠関係者）〔A11〕
<p>平成15年度フォローアップ調査報告書の要約</p>	<p>神奈川県横浜市瀬谷区には、第2海軍航空廠瀬谷工場があり、終戦時に旧軍毒ガス弾等を保有していたと記録されている。</p> <p>生産・保有情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昭和20年9月9日現在、横須賀海軍軍需部（池子・瀬谷）には、イペリット充填爆弾約10,000発、中口径砲用型薬缶（くしゃみ・催涙）約30,000個、催涙剤52,0

	<p>00kgが存在していた〔1〕。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・終戦時に瀬谷には、マスタード60kg爆弾5,680発が存在していた〔2〕。 ・昭和20年9月9日現在、横須賀地区（池子・瀬谷）の保有量は、毒瓦斯60kgイペリット爆弾約10,000発〔3〕、中口径砲弾用型薬缶（クシャミ又は・催涙ガス）約30,000個、催涙ガス52tであった〔4〕。 ・終戦時に、神奈川県瀬谷の第2海軍航空廠には6番1号爆弾が8,852発存在していた〔5〕。 ・相模海軍工廠で生産された60kgマスタードガス爆弾のうち、瀬谷には8,852発存在していた〔6〕。 ・昭和20年10月に、瀬谷の倉庫には60kgイペリット爆弾約4,000発が存在していた〔7〕。 ・終戦時、海軍航空廠瀬谷工場には、イペリット150.5t存在していた〔8〕。 <p>現在の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・旧相模海軍工廠瀬谷工場跡地は、日米安全保障条約及びそれに基づく地位協定により米国に提供され、現在、米軍上瀬谷通信施設となっている〔10〕〔11〕。
<p>新たな情報</p>	<p>生産・保有情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・元海軍大佐（化学兵器等の研究生産担当主務者）は、戦時中に三号特薬（糜爛剤）を約2万個分準備し、その半数を神奈川県瀬谷火薬庫と大分県耶馬溪の洞窟内にそれぞれ貯蔵したと記している〔A1〕。 <p>廃棄・遺棄情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各海軍航空廠工場にあったイペリットの爆弾装填用缶は、昭和21年8月頃までの間に米軍の監督指示により海中に投棄処分されたとしている〔A2〕。 <p>その他情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・終戦時の上瀬谷には、横須賀海軍軍需部の瀬谷火薬庫と第2海軍航空廠の瀬谷補給工場が存在していた〔A3〕〔A4〕。また、旧軍関係資料にも、瀬谷地区には、第2海軍航空廠瀬谷補給工場と〔A5〕、横須賀海軍軍需部が存在していたと記されている〔A6〕。 ・終戦直後の第2海軍航空廠瀬谷補給工場には、特薬庫（覆土式）と特薬筒を集積した爆弾庫が存在していた〔A5〕。 ・終戦後、旧海軍の軍需部等の用地は米軍に接收されたが、昭和22年10月に接收が解除されたので、農地への転売準備がなされたが、昭和26年3月に再接収されて、米軍上瀬谷

	<p>通信施設が設置された〔A7〕〔A8〕。昭和44年以降、米軍上瀬谷通信施設内の土地の一部利用が認められ、国も施設内の農地を耕作者に売り渡すなどしている〔A7〕。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在、米軍上瀬谷通信施設は約242万㎡の面積を有し、オペレーション地区・住宅地区等は、囲障が設けられ、立入禁止区域とされているが、その他の区域は、提供条件として農耕が認められていることから、その範囲内での立ち入りが許可されている〔A7〕。 ・平成9年12月の横浜市議会の委員会において、終戦時に旧軍毒ガス弾8,852本が在日米軍上瀬谷通信施設内に存在していたとの情報が米軍資料に記されていることが取り上げられ、横浜市は8日に「武装解除後の武器の権利は当時連合軍にあった。米政府の回答では『あまりに古い話で記録が発見できなかった』。専門家の話からは、当時の海軍瀬谷補給廠にあった8,852本の毒ガス弾はその後海洋投棄されたと推測できる」と答弁している〔A9〕。また、この情報について、「市は国と米国に事実関係を参照。これに対し国は『旧日本軍の武器の処理は連合軍が行い、日本政府は処分された武器の追跡調査をしていない』と回答。米軍側は『あまりにも過去のこと。確認できる記録を発見できなかった。現在の上瀬谷通信基地には存在しない』と返答した」との記載がある〔A10〕。 ・旧相模海軍工廠関係者は、「（相模海軍工廠の）第3工場で作られた毒ガス爆弾は、廠内に引き込まれている鉄道によって貨車でどこかへ運ばれていました。当時同じ作業に従事していた工員同士の推測の噂かもしれませんが、上瀬谷（横浜市）の倉庫に貯蔵しているのだという話を聞きました」と記している〔A11〕。
--	--

事案名	横浜市内の事案（神奈川県 14 - 11 - 2）
フォローアップ調査資料	・化学室担当者ノート「戦後における旧軍毒ガス弾等の処理の状況（14.6）〔9〕
追加資料	・『日吉台地下壕』（1993年4月）〔A1〕
平成15年度フォローアップ調査報告書の要約	<p>発見・被災・掃海等処理状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昭和37年7月に、神奈川県横浜市内でイペリットボンベ1個が発見されたが、処分は不明と記載されている〔9〕。
新たな情報	<p>その他情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毒ガス弾等に係る情報は得られていないが、日吉の教育施設敷地内には、『昭和19年9月から昭和20年8月まで海軍の重要な施設が集中しており、地下施設と呼んでいた』との記載がある。この地下壕には、連合艦隊司令部と海軍総隊司令部が入っていたとの記載がある〔A1〕。

事案名	逗子市・横浜市（第2海軍航空廠・横須賀海軍軍需部[池子]）の事案（神奈川県14-11-3）
フォローアップ調査資料	<ul style="list-style-type: none"> ・『相模海軍工廠』1984年〔1〕 ・「毒瓦斯及其ノ充填兵器処理ニ関スル件」昭和20年9月〔3〕 ・「日本海軍ニ於ケル化兵戦関係概況」（日付なし）〔4〕
追加資料	<ul style="list-style-type: none"> ・「航空隊引渡目録4/14」〔A1〕 ・「濱名湖に投棄された軍用ガスの処分について（通知）」昭和24年12月28日〔A2〕 ・『神奈川の米軍基地』（平成13年2月）〔A3〕 ・『横浜市と米軍基地』（平成15年）〔A4〕 ・「第2海軍航空廠引渡目録」〔A5〕 ・「横須賀海軍軍需部引渡目録」1/3〔A6〕 ・「横須賀海軍軍需部引渡目録」3/3〔A7〕
平成15年度フォローアップ調査報告書の要約	<p>第2海軍航空廠及び横須賀海軍軍需部（池子・瀬谷）には、終戦時に毒ガス弾等を保有していたと記録されている。</p> <p>生産・保有情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昭和20年9月9日現在、横須賀（池子・瀬谷）には、イペリット充填爆弾約10,000発、中口径砲用型薬缶（くしゃみ・催涙）約30,000個、催涙剤52,000kgが存在していた〔1〕。 ・昭和20年9月9日現在、横須賀地区（池子・瀬谷）の保有量は、毒瓦斯60kgイペリット爆弾約10,000発〔3〕、中口径砲弾用型薬缶（クシャミ又は催涙ガス）約30,000個、催涙ガス52tであった〔4〕。
新たな情報	<p>生産・保有情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「横須賀補給工場」の「池子」には、1号60kg爆弾が「2,496(10,811)」発存在していたと記されている〔A1〕。 <p>廃棄・遺棄情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各海軍航空廠工場にあったイペリットの爆弾装填用缶は、昭和21年8月頃までの間に米軍の監督指示により海中に投棄処分されたとしている〔A2〕。 <p>その他情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昭和13年に「旧日本海軍が軍需部池子倉庫（逗子市域）を設置し、その後第2海軍報空廠補給部池子工場として引き継

	<p>がれた」が、終戦後、池子は米軍に接收され、現在米軍池子住宅及び海軍補助施設になっている〔A3〕。なお、米軍池子住宅及び海軍補助施設は逗子市及び横浜市にわたっており、鎌倉市に隣接している〔A3〕〔A4〕。</p> <ul style="list-style-type: none">・第2海軍航空廠横須賀補給工場池子火薬庫地区の配置図〔A5〕及び横須賀海軍軍需部池子・久木建築物位置図によれば〔A6〕〔A7〕、旧第2海軍航空廠横須賀補給工場池子火薬庫跡地のほぼ全域が現在の米軍池子住宅及び海軍補助施設の敷地〔A4〕に含まれている（一部含まれない場所も存在）。
--	---